

# 「我が人生思い残すことなし」(後編)

きたごう はると  
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 昭男と美子は北海道から孫の雄大とはるかを神戸の家に迎えていた。父大志はその年の1月、神戸を襲った大震災の救援に出掛けたまま姿をけした。その事は両親の昭男と美子にも雄大やはるから子供達の心にも影を落としていた。 =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 [www.kyodo-keiei.co.jp](http://www.kyodo-keiei.co.jp))

## 6. 墓参

「まー、暗い話はこれでお仕舞いや。」昭男はしばらく沈黙の後、まず切り出した。「そや、今考えてもしゃあない。そや、明日からお盆やし、みんなでお墓参りに行こか？」美子が提案した。「それがええ、ほんなら奈良と京都と両方行こか？雄大たちも行った事ないやろうし。」昭男が同意した。「お墓2つあるの？」はるかが不思議そうに聞いた。「あんな、奈良はじいちゃんのご先祖さん、京都はばあちゃんのご先祖さんのお墓なんやで。」美子が説明した。「俺、行きたい！」雄大が元気に答えた。「私も。」はるかも続いた。「そしたら早よ寝よか。明日は早やいで、6時起きや。」「は～い、お休み～。」

次の日昭男ら4人はJRで奈良に向かっていた。「今は便利でな。新しい路線がどんどん増えて奈良まで一直線や。午前中には最初の墓参り終わってお昼から京都に行けるで。」「雄大は今年受験やな。どこの高校行くの？将来は何になりたいの？」美子が尋ねた。「お兄ちゃんはね。アニメーターになりたいんだって。」はるかが口を挟んだ。「アホ。それはもうやめた。」雄大はあわてて否定した。「アニメーターって何？」美子が聞き返した。「アニメーターってまんが書く人。」はるかが答えた。「あーまんが家な。」美子は納得した様子だったが、雄大は「違う。作家じゃなくて映画とかの原画を作る人の事。」「そうか。それもかっこよさ



そうやな。」美子が共感した。「でも、俺才能ないから・・・」雄大が口ごもった。「そんなら何になりたいん？」今度は昭男が聞いた。「それが分からへん。今いろいろ考えてんねん。」「あら？お兄ちゃん関西弁になってる。」「ほんまや。」「アハハハ・・・。」みんなが一斉に笑い出した。しばらくして奈良到着後、お墓に向かう途中奈良公園を通った。「うわ～。鹿さんが一杯いる～！！」はるかがはしゃいだ。「鹿せんべい買ってきて来るか？食べさせられんやで。」美子がすすめると「やる、やる、早く食べさせたい！」とはるかが賛成した。「ばあちゃん鹿食べへんわ。」「はるか、怖がってたらあかんで。ちゃんと食べるまで手動かさんようにせんと。」「ところではるかも関西弁やな。」「ホンマや、これで全員関西人や。」一同大爆笑の後、

奈良の墓参りの後、次は近鉄特急で京都に向かった。「もうお昼やし駅弁買って電車で食べよか？」「わーい、駅弁大好き。」はるかが真先に賛同した。みんなの分を買って電車に乗り込んだ。「指定席やからみんなで座れるで。」昭男が言った。「わーすごい快適！」雄大も感激した。「特急は修学旅行で乗っただけやし。」「そうか？ほんたら今度は新幹線に乗るか？そうや、ほんたら広島へ行こ。じいちゃんのお母さんのふるさとや。」「え！ほんとにいいの？すごい！学校で習った原爆とか。」「そうか。よし、決まりや。しやけどその前に京都や。」「あっ忘れてた。そうだ京都へ行こう。」「どっかで聞いたセリフやな。まーええわ。」「そや。早よ駅弁食べよ。」「ハイ。いただきます。」 (つづく)

